

VI 考察及び次年度の課題

富山大学では、2010年5月現在36名の発達障害学生およびその傾向のある学生の支援を行っているが、その内診断のある学生は7名に留まる(表2参照)。更に、平成22年度になって初めて発達障害を診断名とした入試の際の配慮要請があったとはいえ、入学時から全ての発達障害学生とつながりを持って支援を開始できているわけではない。発達障害を診断名とした入試の配慮要請や入学時からの修学支援要請はこれからますます増えていくことは間違いないところだが、同時に診断はないが発達障害傾向のある学生が支援の要請なく入学し、その後の修学において困難に直面するケースもなくなることはないであろう。そういったことから本調査研究では、前述の2パターンのつながり方を想定して、大学の受け入れ体制づくりを目指す必要があるといえる。

第一に、入学時から修学支援要請のあるケースでは、大学ホームページの工夫やオープンキャンパスにより入学後の適切な支援情報を提供し、本人の適性を確認することで、大学進学への不安軽減を図っていくことが大切である。一方、入学時に本人が支援の必要を感じていないケースでは、入学早期のドロップアウトや、休学、留年、研究室での対人トラブルなどの支援ニーズのサインとなる状況で、いかにスムーズに支援窓口につながるようにするかといった学内連携を重視した修学支援体制が必要であると思われる。

今年度の調査研究では、前年度の調査とこれまでの発達障害学生支援で培った経験を生かし、あらかじめ困難な場面を想定し必要な情報と支援を提供することで、入学前の移行支援については概ね順調に進めることができた。次年度は発達障害学生の入学後の移行支援ニーズを探りつつ、大学の受け入れ体制についてアクション・リサーチを行っていく。加えて、平成20年度から行ってきた一連の本研究の成果として、高校教職員向けの「発達障害生徒への進学相談ガイドライン」と大学教職員向けの「発達障害学生への移行支援ガイドライン」を作成し、関係各所に発信していく予定である。

表2. 富山大学における障害学生数(把握人数)

2010年5月現在		
	把握している学生数	支援を受けている学生数
視覚障害	3	2
聴覚障害	3	2
肢体不自由	0	0
病弱(内部疾患等)	0	0
発達障害(ASD) ○は発達障害の診断を受けている学生数	24(4)	17(3)
発達障害(ASD・ADHD複合) ○は診断を受けている学生数	8(3) *ASDの診断	8(3)
発達障害(ADHD) ○は診断を受けている学生数	13(1)	10(1)
発達障害(LD)	1(0)	1(0)
合計 ○は発達障害の診断を受けている学生数	52(8)	40(7)

ASD: 自閉症スペクトラム(高機能自閉症・アスペルガー症候群)
ADHD: 注意欠陥・多動性障害
LD: 学習障害